

調査報告

トロス司教座聖堂発掘報告(二〇一四)

―出土貨幣及び封緘について―

キーワード

古代末期 ビザンツ トロス 貨幣 封緘

二〇一四年夏に行われた聖堂発掘作業では、三世紀末からユステイニアヌス時代までの四枚の貨幣と年代不詳の貨幣が一致、また一枚の鉛封緘が出土した。昨年出土した貨幣のうち、前年度に報告できなかった銅貨一点と併せて、以下にその内容を報告する。

(一) 貨幣

① 銀銅貨(アウレリアヌス貨、西方皇帝マクシミアヌス治世(二八六―三〇五、三〇六―三〇八、三一〇年)(写真1 a・b)^①



写真1a 表面



写真1b 裏面

・出土場所 附属礼拝堂表層
・直径 二四 mm
・重量 三・九 g

村田光司

・型打ち軸 一八〇度

・造幣局 ローマ(?)

・造幣年 二九三—二九四年

表面には放射状に広がる冠を被り、帝衣をまとい、左を向く皇帝の胸像が見える。手には先端に鷲を象った笏が握られている。胸像の周囲には、次のような銘文が読み取れる。

IMP MAXIMIA[N]VS[PF]A[VC]

Imp(erator) Maximia[n]us [P(ius) F(elix)]
A[ug(stus)]

「皇帝マクシミアヌス、敬虔にして幸運なるアウグストゥス」

裏面には右を向いたニケの立像があり、彼女は椰子の木に接する丸盾を掴んでいる。盾には二行にわたって「VO—T—X」と刻まれている。下部外辺には「XXI Δ」とある。ニケを囲む形で、次の銘文が見える。

PRIMIS X MVLTIS XX

Primis (Decennialibus) Multis (Vicennialibus)

この貨幣は、二七四年にアウレリアヌス帝によって導入された、いわゆるアウレリアヌス貨の一種である。これは元々二一五年にカラカラ帝によって導入された銀銅貨（いわゆるアントニアヌス貨）がそれまでに被ってきた度重

なる品位低下を食い止めるために改訂されたもので、五%の銀含有率を保つとされた。一般にアウレリアヌス貨は、表面の放射状に広がる冠を被った皇帝の胸像と、裏面下部外辺に刻まれた「二〇」と「一」を示す数字を特徴とする（ローマ数字で「XXI」、ないしギリシア数字で「KA」と表記される場合が多い）。この数字は通説では、銀と青銅の含有率が二〇対一であることを示すものと解釈されている。一方で各地の造幣局は、番号を付された複数の「工房（officinae）」に分かれて造幣を行っており、「XXI」ないし「KA」の右隣に造幣した工房の番号をギリシア数字で刻む^②。同時期の他の種類の貨幣と同様、造幣局の場所を示す記号も裏面に刻まれることがあるが、すべてではない^③。

さてわれわれの貨幣の造幣局と造幣年を検討するにあたって鍵となるのは、裏面に見える「PRIMIS X MVLTIS XX」と「VOT X」といった文句である。これは最初の一〇年の治世を祈念する神への奉献が達成されたことと、さらなる一〇年への奉献を行うことを意味する定型文である。従ってこの貨幣は皇帝の治世一〇年祭（Decennalia）の際に発行されたものであることがわかる。とはいえA・シヤスタニョルによれば、この一〇年祭が祝うのは二八五年にカエサルとなったマクシミアヌスの治世一〇年目ではなく、二八四年に即位したディオクレティアヌスの

それである。^①つまり貨幣の発行時期は、ディオクレティアヌスの治世一〇年目、すなわち二八三年一月からの一年間ということになる。

同時期の他の貨幣との比較から、裏面の右側には造幣局の場所を示す記号が刻まれていることが期待されるが、ここでは確認することが出来ない。明確なのは、この貨幣が帝国の某造幣局の「第四工房」(裏面下部外辺の「A」)で造幣されたということだけである。現在のところ「PRIMIS X MVLTTIS XX」という定型句が刻まれる貨幣のうち、ローマ以外で造幣されたことが明らかなのは見つかっておらず、この定型句をもってローマ産とするのが古銭学上の通説となっている。^{②③}

②青銅貨(フォリス貨、四〇ヌムス)、皇帝アナスタシウス一世治世(四九一―五一八年)(写真2a・b)



写真2a 表面



写真2b 裏面

・出土場所 附属礼拝堂表層
 ・直径…二三mm
 ・重量…五・三g
 ・型打ち軸…一八〇度
 ・造幣局…コンスタンティノープル
 ・造幣年…五〇七―五一二年
 表面の画像を見分けることは難しいが、周囲に刻まれた銘文の一部を読み取ることができる。

PN[ANASTA SI]Y[SPAVC]
 (Dominus) N(oster) [Anastasi]u[s] P(er)p(etuus)
 Aug(ustus)

「我らが主アナスタシウス、永遠のアウグストゥス」
 裏面には巨大な「M」の文字が中心を占め、左右に星形の点が打たれている。上部に十字が、また「M」に囲まれる形で小さく「B」とあり、横線で区切られた下部には「CON」と刻まれている。

アナスタシウス一世の幣制改革によって導入された四〇ヌムス貨である。「M」は数詞の四〇を意味する。彼の治世における四〇ヌムス貨は大まかに四段階に分けられるが、この貨幣はその直径と意匠からして第二期(五〇七―五十二年)に属するものと考えられる。^④「CON」および「B」は、この貨幣がコンスタンティノープル造幣局の第二工房で造幣されたことを示す。^⑤

③青銅貨（フォリス貨、四〇ヌムス）、皇帝アナスタシウス一世治世（四九一―五一八年）（写真3a・b）



写真3a 表面



写真3b 裏面

「我が主アナスタシウス、永遠のアウグストゥス」

裏面には数詞の四〇を示す巨大な「M」を中心に、左右に二つの星がそれぞれ上下に点を伴って並び、上部には十字架、「M」の内側に造幣局の工房番号を示す「E」、横線で区切られた下部に「CON」が見える（つまりコンスタンティノープル造幣局第五工房）。

大きさと重量、意匠から判断して、アナスタシウス一世治世の最晩年（第四期、五一七―五一八年）に造幣された四〇ヌムス貨である。

④青銅貨（フォリス貨、二〇ヌムス）、皇帝ユスティニアヌス一世治世（五二七―五六五年）（写真4a・b）



写真4a 表面



写真4b 裏面

表面には、片側の肩部に留め金（fibula）を持つ帝衣（paludamentum）と胴鎧を纏い、花冠を被って右を向いた皇帝の胸像があり、周囲には次のように刻まれている。

DNANASTA SIVSPAVC
D(ominus) N(oster) Anastasius P(er)p(etuus)
Aug(stus)

- ・出土場所 附属礼拝堂表層
- ・直径 三四mm
- ・重量 一八・三g
- ・型打ち軸 一八〇度
- ・造幣局 コンスタンティノープル
- ・造幣年 五一七―五一八年

- ・出土場所 附属礼拝堂表層
- ・直径 二八mm

トロス司教座聖堂発掘報告(村田)

・重量 一二・〇g

・型打ち軸 一八〇度

・造幣局 ニコメディア

・造幣年 五四一—五四二年

表面には羽飾りのついた冠を被り、胴鎧を纏って正面をむいた皇帝の胸像があり、その右手は十字架を握り、左肩は盾を被っている。左肩の上方にはもう一つ十字架が見える。胸像の周囲には次のように刻まれている。

DNIVSTINI ANVSPAVC

D(ominus) N(oster) Iustinianus P(er)p(etuus)

Aug(stus)

「我らが主ユスティニアヌス、永遠のアウグストゥス」裏面には、中心に巨大な「K」の文字が見え、上部には上端に穴の空いた十字架「P」、左側に「ANNO」の文字、右側に「XXY」、下部に「NI」と刻まれている。

アナスタシウス一世の幣制改革によって導入された二〇ヌムス貨である(「K」は数詞の二〇)。ユスティニアヌス期に特徴的なのは、裏面に造幣年が刻まれることである。われわれの貨幣はユスティニアヌスの治世一五年目、すなわち五四一—五四二年のものと分かる。「NI」は造幣局の場所を示す省略記号で、ニコメディアを指す^⑤。

⑤青銅貨(AE4ないし五ヌムス貨^⑥)、四—七世紀(?) (写真5a・b)



写真5a 表面



写真5b 裏面

・出土場所 祭壇部北西隅 WM2の下層
・直径 一一mm
・重量 一・六g
・型打ち軸 不明
・造幣局 不明
・造幣年 四—七世紀(?)
両面とも意匠を読み取ることができず、同定は困難である。二〇—三年報告の貨幣^②と同じく、AE4ないし五ヌムス貨の可能性が高いが、この貨幣が祭壇部の北西隅、第二白色モルタル層 WM2の下準層から出土した事実を考慮に入れると、場合によってはさらに時代を遡るものである可能性も捨てきれない。

補遺（二〇一三年出土）フォリス銅貨（二一世紀後半）（写真6a・b）



写真6a 表面



写真6b 裏面

・出土場所 附属礼拝堂表層

・直径 二七mm

・重量 六・〇g

・型打ち軸 〇度

・造幣局 コンスタンティノープル（？）

・造幣年 一〇六五年頃—一〇七〇年頃

表面には、上辺を中心に小球を連ねた縁飾りと、わずかにニンブスの一部が確認できる。縁飾りの外に別の縁と銘らしきものが見え、この面が重ね打ちされたものであることがわかる。

裏面には小球を連ねた縁飾りのなかに、ニンブスを伴い正面を向いたマリアの胸像がある。彼女は両手を挙げたオ

ランスの姿勢である。

さらなる意匠を読み取ることは困難であるが、以上の情報から、これが九七〇年から一〇九二年まで造幣されたフォリス銅貨（いわゆる Anonymous Folles）の一種で、コンスタンティノス一〇世（一〇五九—一〇六七年）とエウドキア（一〇六七—一〇六八年）、ロマノス四世（一〇六八—一〇七一年）の治世をまたいで作られたGクラス（一〇六五年頃—一〇七〇年頃）に属するものであると推測できる。この推測が正しいとすれば、表面はニンブスを伴って正面を向き、巻物を左手に持つキリストであったはずである。

（二）封緘

①鉛製封緘、未使用（写真7a・b・c）



写真7a 表面



写真7b 裏面

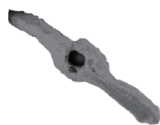


写真7c 側面

・出土場所 祭壇部の北側、壁PW10付近の石板の間

トロス司教座聖堂発掘報告（村田）

・直径 一九 mm

・重量 五・三 g

印章を打刻する前の、未使用の封緘である。穴の空いた円筒形の膨らみが中心を貫いているが、この穴は封緘を文書等に付す際に用いる紐を通すためのものであり、その紐を通し終わった後に打刻し、穴を閉じるという仕組みである。^⑭

これがいかなる人物の所持品であったのか断定することは難しい。聖堂の祭壇部という出土位置から、まず想定されるのは聖職者、おそらくはトロス主教である。というのも一般に、地方において封緘を利用したことが確認される聖職者は（大／府）主教や修道院長に限られるからである。^⑮ われわれは直接の比較対象となりうる実例を二点知っている。

トロス主教ヨハネス（七—八世紀）…直径二五 mm（利用面一九 mm）、重量二三・五五 g^⑮

トロス主教テオドロス（一〇世紀末—一一世紀初頭）直径二〇 mm、重量不明^⑮

一方で、祭壇部が聖堂としての機能を果たしていない時期があったことを考慮に入れるならば、この未使用封緘が現地を訪れた世俗官僚ないし個人のものであった可能性も大いにある。

現時点で言えるのは、この封緘がおそらく九世紀以降に属するものであるというだけである。五・三グラムという目方はビザンツの鉛製封緘のなかでもかなり軽い部類に属するが、こうした軽量の封緘はとりわけ一一世紀以降に頻繁になる一方、八世紀以前にはほとんど確認されていない。^⑮

註

- (1) この貨幣の同定作業を手伝ってくれた浦野聡、師尾晶子、向井朋生の各先生に感謝いたします。
- (2) アウレリアヌス貨について概略的には、S. Estiot, *The Later Third Century*, in W. E. Metcalf (ed.), *The Oxford Handbook of Greek and Roman Coinage*, Oxford, 2012, pp. 538-560: pp. 545-548 を見よ。アウレリアヌス貨の額面価値については二―五デナリウスまで、様々な説が提起されており決着をみていない。次の学説史展望を参照。M. Corbier, *Coinage and taxation: the state's point of view*, A.D. 193-337, in A. Bowman et al. (eds.), *The Cambridge Ancient History XII: The Crisis of Empire, A.D. 193-337*, 2nd ed., Cambridge, 2005, pp. 327-392 (このうち pp. 340-341)。
- (3) H. Mattingly / E. A. Sydenham (eds.), P. H. Webb (author), *The Roman Imperial Coinage* (以下 *RIC* と表記), Vol. V-1, London, 1927, pp. 248-362 及び Vol. V-2, London, 1933, pp. 1-295 において紹介や記述のある 274 年から 295 年頃 (アウレリアヌス貨の廃止時期) の貨幣の多くが「Antoniniani」の項目を見よ (このカタログが刊行されたとき、まだ「アウレリアヌス貨 Aureliani」という区分はなかった)。
- (4) A. Chastagnol, *Les années régnales de Maximien Hercule en Egypte et les fêtes vicennales du 20 novembre 303*, *Revue numismatique*, 6e s., 9 (1967), p. 54-81, 以下 p. 60-62. 皇帝にちなみ神々の奉納にちなむ H. Mattingly, *The Imperial 'Vota', Proceedings of the British Academy* 36 (1950), pp. 155-195: 37 (1951), pp. 219-268 及び T. V. Buttrey, *The Dates of the Arches of "Dioeletian" and Constantine*, *Historia: Zeitschrift für Alte Geschichte* 32-3 (1983), pp. 375-383, 特に pp. 375-377.
- (5) Cf. *RIC*, V-2, pp. 213-214. われわれの貨幣と同じ定型句および意匠 (ニケの立像) を持つ類似として現在確認できるのは、*RIC*, V-2, no. 513 である。この型は五種類のバリエーションが挙げられており、すべてに工房番号が付されているが、造幣局記号があるのは一種類のみである (造幣局記号なし: 第一、第五、第六、第七工房。造幣局記号あり: ローマ第五工房)。裏面に同じ意匠を持つディオオクレティアヌスの類例も参照 (*RIC*, V-2, no. 177)。
- (6) W. R. Hahn, *Moneta Imperii Byzantini: Rekonstruktion des Prägeaufbaues auf synoptisch-tabellarischer Grundlage*, Teil I. *Von Anastasius I. bis Justinianus I.* (491-565), *einschliesslich der ostgotischen und vandalschen Prägungen*, Wien, 1973, S. 33-35.
- (7) Cf. A. R. Bellinger, *Catalogue of the Byzantine Coins in the Dumbarton Oaks Collection and in the Whittemore Collection*, vol. I, Washington D. C., 1966, p. 15. ただしこの貨幣は、コンスタンティノープルの第二工房で造幣された同時期の一般的な四〇ヌムス貨 (nos. 20b.1-20b.5: 8.23-9.65 g.) と比較してかなり軽く。
- (8) Hahn, *Moneta Imperii Byzantini* I (註 9), S. 33-35. Bellinger, *Catalogue* I (註 7), p. 22, no. 231.1 に類例。
- (9) Bellinger, *Catalogue* I (註 7), p. 119, no. 142 に類例。
- (10) 村田光司「テロス司教座聖堂発掘報告 (二〇一三)

- ―出土貨幣及び封緘について』『史苑』七四―二(二〇一四)・一五八一―六七頁・一六〇頁。
- (11) Ph. Grierson, *Catalogue of the Byzantine coins in the Dumbarton Oaks Collection and in the Whittemore Collection*, vol. III. 2, Washington D. C., 1973, pp. 634-706. グリアースンは大分類で一五のクラスを提示している。
- (12) 一〇―一世紀のフォリス銅貨のうち、裏面にマリアの胸像を描くのはGクラスのみにある。グリアースンは造幣局をコンスタンティノープルとするが、地方での造幣の可能性も排除していない。 *Ibid.*, p. 692.
- (13) 未使用封緘は出土数が少なく、研究もわずかである。そこであたり N. Oikonomides, *The Lead Blanks Used for Byzantine Seals*, in id. (ed.), *Studies in Byzantine Sigillography* 1, Washington D.C., 1987, pp. 97-103; J.-Cl. Cheynet, *Introduction à la sigillographie byzantine*, dans id., *La société byzantine. L'apport des sceaux*, vol. I, Paris, 2008, p. 1-82; p. 8-10.
- (14) V. Laurent, *Le Corpus des sceaux de l'empire byzantin*, vol. V. 1. *L'église*, 3 parties, Paris, 1963-1972.
- (15) Laurent, *Corpus V* (註14), no. 511 = J. Nesbitt / N. Oikonomides, *Catalogue of Byzantine seals at Dumbarton Oaks and in the Fogg Museum of Art 2: South of the Balkans, the Islands, South of Asia Minor*, Washington D.C., 1994, no. 811.
- (16) Laurent, *Corpus V* (註14), no. 512. ローランによる推定年代は「XI s. (début)」だが、この封緘の意匠はスィン
- イオス二世治世(九七六―一〇二五)に特徴的なものであり、必ずしも一世紀初頭に絞れるわけではない(J. C. シェネ教授の指摘による)。この封緘は元々一九世紀の歴史家 G. J. Schlumberger の私蔵品であったが、現在は行方不明である(エルミタージュ美術館の可能性が示唆されている)。
- (17) 例えばリキア地方の封緘について Nesbitt / Oikonomides, *Catalogue* (註15), Chapter VI, *The south of Asia Minor*, pp. 150-181 のカタログを参照。一世紀の封緘がかなり小型傾向にあることはイコノミディスも指摘しているが、その背景として彼は同時期の帝国における鉛供給量の減少を推測している。Oikonomides, *The Lead Blanks* (註13), p. 100.

(名古屋大学大学院／日本学術振興会特別研究員DC)

Basilica Excavation Report, Tlos, 2014: Coin and Seal

MURATA, Koji

In this report we present five coins and a seal found at the Basilica in 2014, with another coin found in 2013, which has not been reported.

Coin

1. Billon Aurelianus of Emperor Maximianus (Date struck: 293-294)
 2. Bronze Follis (40 nummi) of Emperor Anastasius I (Date struck: 507-512)
 3. Bronze Follis (40 nummi) of Emperor Anastasius I (Date struck: 517-518)
 4. Bronze Follis (20 nummi) of Emperor Justinian I (Date struck: 541/542)
 5. Bronze AE4 or Pentanummium (?) (Date struck: 4th-7th C. ?)
- Addendum (found in 2013). Anonymous Copper Follis (Date struck: c. 1065-c. 1070)

Seal

1. Lead Blank (after 11th C. ?)